

## 「この世をば…」道長と白色土器

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



出土した白色土器 手前から蓋、皿、三足盤、椀、高杯の脚部

京都和風迎賓館建設にともなう発掘調査では、江戸時代の成果が大きく報じられてきましたが、平安時代に関しても様々な成果が得られています。ここでは白色土器が大量に出土した遺構を取り上げ、平安時代中期の様子を紹介します。

調査地は平安京左京の北東隅、北辺四坊の五町から八町に該当します。白色土器が出土した遺構は五町の東端で検出しました。この土壌は一辺5mほどの方形で、整理箱20箱に及ぶ遺物が出土しました。大半は土器類で、土師器を中心に黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・白色土器・輸入陶

磁器があります。いずれも保存状態は良好で、10世紀末から11世紀初めに属する土器群です。

白色土器には皿・椀・高杯・三足盤と蓋があります。蓋は1点のみですが、他は数多くあります。

この白色土器は、ロクロ成形で作られた白色を呈する器です。底部の輪高台は削り出して作られ、器表面は丁寧にへら磨きされ、形や大きさ、成形の特徴は緑釉陶器に共通していますが、釉薬をかけずに焼き上げる点が異なります。

緑釉陶器は平安宮並びに京内の邸宅跡などから普通に出土します。しかし白色土器は、平安宮内裏で

も「<sup>こうきゅう</sup>後宮」と呼ばれた特別の区域や京内の離宮、並びに皇族、高級貴族の邸宅とみられる場所から出土するため、使用する人たちはさらに限定されていたと思われます。

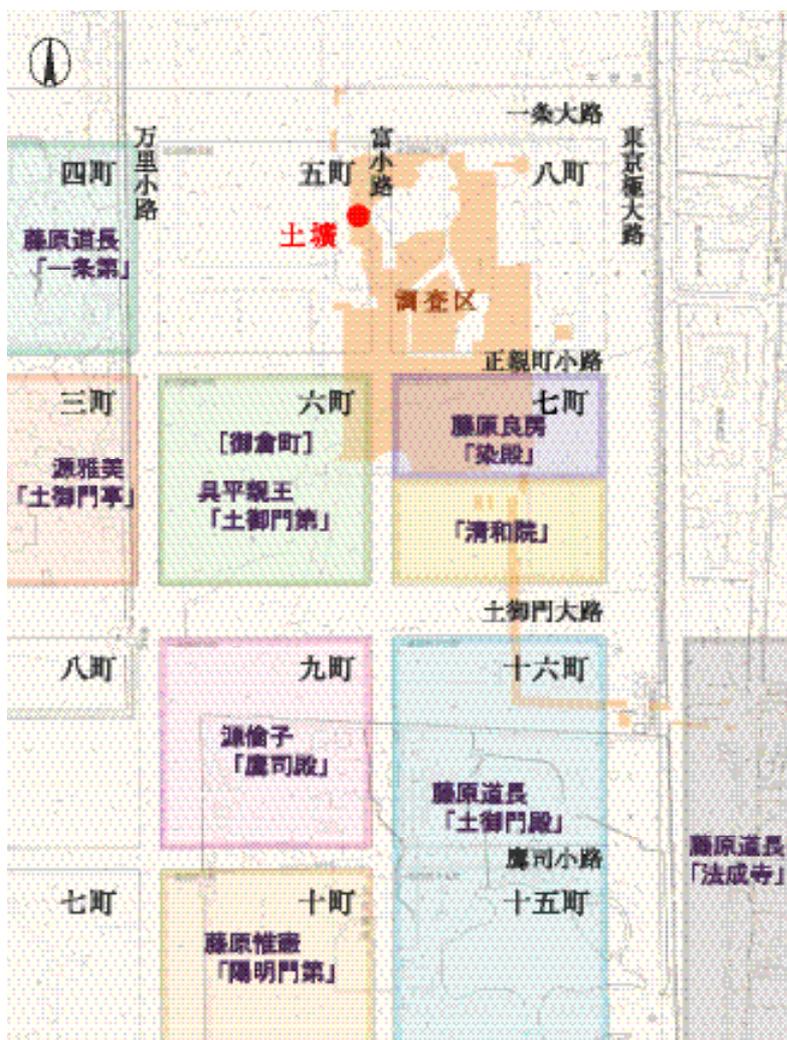
白色土器の用途については、「<sup>はくさん</sup>白散」「<sup>どしやうきん</sup>度嶺散」と墨書した蓋が鳥羽離宮跡などで出土していることから、薬を入れる容器の蓋として使用されていたことがわかっています。また、緑釉陶器や灰釉陶器にはない高杯が数多くあることや、三足盤の比率が高いことから、特別な儀式用の器であったと思われます。

平安時代中期における五町・八



写真2 調査区を北上空から

調査は南に進展し、白色土器が出土した遺構は埋められている。道長の土御門殿は、現在の仙洞御所の辺りに位置した。寺町通の東には法成寺もあった。



調査区の配置図と条坊・邸宅名 『平安京提要』1995年から作成

町の邸宅は明らかにはなっていませんが、南の七町には「染殿」がありました。ここは平安時代前期に摂政に就き、藤原北家が栄華する基礎をつくった藤原良房の邸宅です。前期の染殿は、西側の六町も含めて東西二町を占めていましたが、中期になると六町には具平親王の「土御門第」がおかれ、七町も南半が清和上皇の後院「清和院」となります。

しかし白色土器との関係で注目されるのは、土御門大路の南に所在した藤原道長の邸宅「土御門殿」とその氏寺「法成寺」の存在です。さらに付近には、道長邸の一つ「一条第」や妻源倫子の「鷹司殿」、藤原氏の家政機関である「御倉町」などが置かれました。

11世紀初め頃の道長は、天皇・東宮が孫、三后も娘という、比類なき栄華の頂点にいました。「この世をば わが世とぞ思う 望月の...」、と歌ったように、まさに満月のような満ち足りた心境だったのでしょう。このように、当時の調査地周辺は土御門殿や法成寺が儀式を執り行う「ハレ」の場であり、正親町小路の北側はその裏方、「ケ」の場であったと思われます。また御倉町には、儀式で使用する様々な什器が保管されていたことでしょうか、北側に位置する調査地には不要となった品々が廃棄された可能性も考えられます。白色土器が調査地から多量に出土した背景には、当時権力の頂点にいた藤原道長の存在が関係しているとみてよいでしょう。

(丸川 義広)